開港のひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

Number 159

横浜開港資料館

発行日 / 2025（令和7）年5月22日

特別公開　長崎

「バッテイラ渡海之図」江戸時代　当館蔵
長崎版画（長崎絵）のひとつ。「バッテイラ」とは西洋人の用いたボートのこと。大型の貿易船からバッテイラで陸地まで移動した。

p.2-5　特別公開「長崎」 ―開港都市横浜の前提

p.6-9　～横浜市歴史的建造物認定「旧根岸競馬場一等馬見所」認定記念～
館蔵コレクション展「根岸競馬場と建築家J.H.モーガン」

p.10-12　トピック / 閲覧室より / 資料館だより

編集・発行／横浜開港資料館
〒231－0021 横浜市中区日本大通3　電話（045）201-2100
ホームページ http://www.kaikou.city.yokohama.jp/

特別公開
長崎
――開港都市横浜の前提

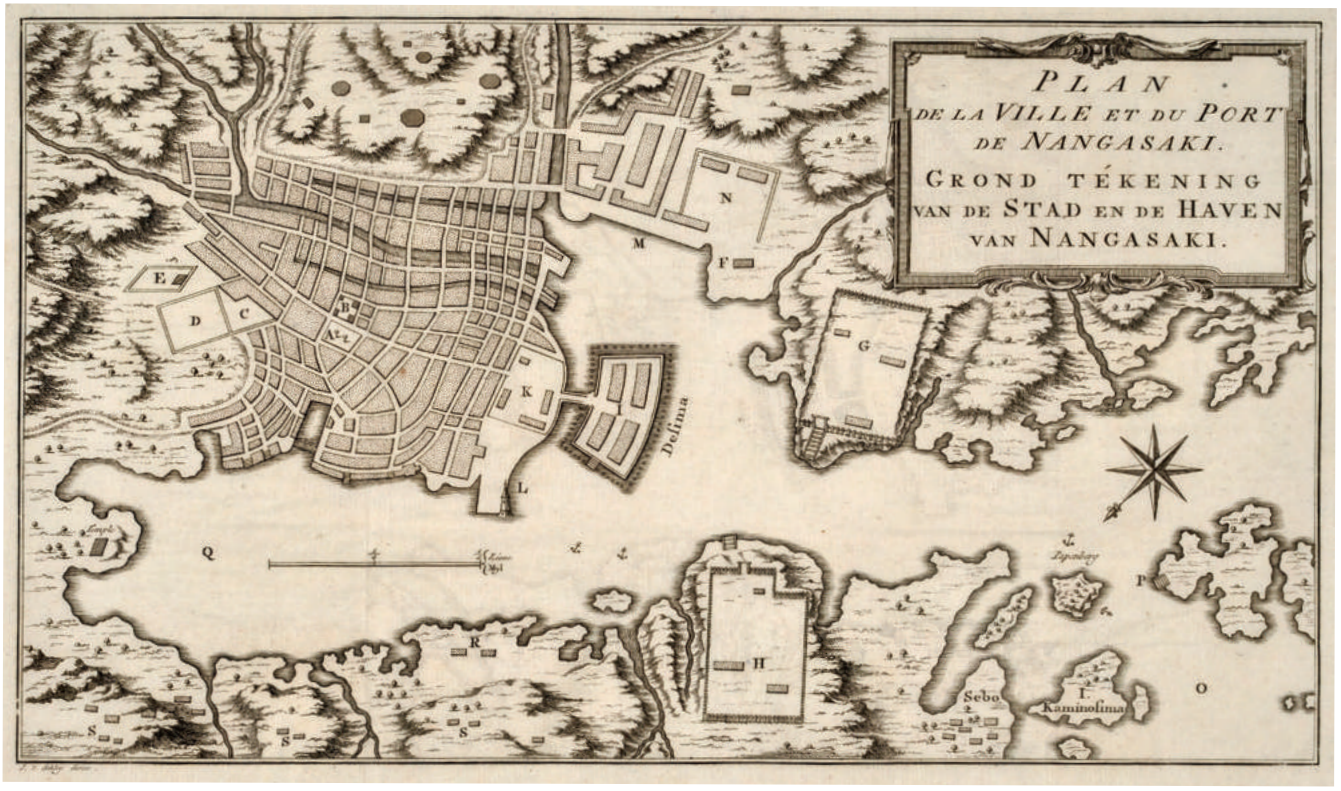

図1　パリで刊行された長崎の地図　"Plan de la Ville et du Port de Nangasaki" 1750年頃　当館蔵

長崎を歩くと、今でも異国情緒をそこここに感じることができる。江戸幕府が海外との交流を制限していた「鎖国」の時代にあって、長崎は対外交渉の窓口のひとつであり、繁栄をきわめた国際貿易港でもあった。その開港は元亀二年（一五七一）。安政六年（一八五九）に開港した横浜よりも、海外交流の歴史は約三〇〇年も古い。

当館は日本と外国との関係を物語る歴史資料を数多く所蔵しているが、そのなかには江戸時代の長崎に関わるものも含まれている。今回の展示では、江戸時代の長崎を幕末に開港した横浜の前提としてとらえつつ、選りすぐりの資料約五〇点から紹介したい。

展示資料の中核を占めるのは、ブルーム・コレクションと呼ばれる当館の一大資料群である。資料を蒐集したポール・C・ブルーム（一八九八～一九八一）は、フランス商人の父と米国人の母のあいだに横浜山手に生まれ、コロンビア・イェールの両大学に学んだ。若いころ世界各地を旅して執筆活動をおこない、第二次世界大戦後、米国務省の職員として再来日する。仕事のあいまに外国人が著した日本関係の書籍や古地図・古写真・錦絵などの蒐集にあたり、コレクションは当館の開館（一九八一年）にさきだって横浜市に譲渡・寄贈された。

長崎に関わる資料についてはこれまで展示で紹介する機会がさほどなかったが、あらためて確認してみると見ごたえのある資料が少なくない。ここでは、横浜と長崎の関係も考えながら主要な資料の解説をおこない、その魅力をお伝えしたいと思う。

地図と旅行記

ブルーム・コレクションの長崎関係資料の中心を占めるのは、地図と旅行記である。それは「地球上いたらぬ所くまなし」とドナルド・キーンに評されるほど、ブルームが旅に

情熱を傾けたことと無関係ではあるまい（ドナルド・キーン「ポール・ブルームの情熱」）。

図1はパリで一七五〇年頃に刊行された長崎の地図である。湾の奥の狭い平地に長崎の市街があり、画面中央にオランダ人が住んだ出島が目立つように描かれる。長崎湾は急峻な崖で囲まれており、出島の右手には湾をはさんで「要塞」（番所）も見える。この長崎湾の風景を日本の旅人がスケッチしたのが図2である。出島が左頁に見え、海上には日本の和船とは異なる形をもつ唐船（中国船）・オランダ船が描かれている。

港町ゆえに平地が狭く、外国人の住む隔離された空間があり、海上には外国船が浮かぶという都市の風景は横浜と同じである。異国情緒あふれる町と港は多くの旅人の興味を惹いた。

長崎において貿易を許されていたのは、オランダ人のほか中国人であった。中国人もオランダの出島同様、唐人屋敷と呼ばれる隔離された一画に集住していた（現館内町）。その内部を描いた絵図もブルーム・コレクションに残されている（図3）。中国人の居住する家屋、唐通詞（日本側通訳）の詰所、宗教施設（天后堂）などが設けられ、周囲には塀と堀がめぐらされている。横浜で外国人居留地の造成を計画するとき、幕府担当者の念頭にはこれら出島や唐人屋敷があったことだろう。横浜の居留地のまわりには堀が掘削され、周囲から隔離されるかたちで建設がなされていくのである。

図2　長崎湾を展望　『長崎記』江戸時代　当館蔵
長崎の地誌・風俗を説明する書籍。『長崎紀聞』として知られる田澤春房の著作と内容はほぼ同一である。田澤は文化4（1807）～5年に長崎を訪れた。

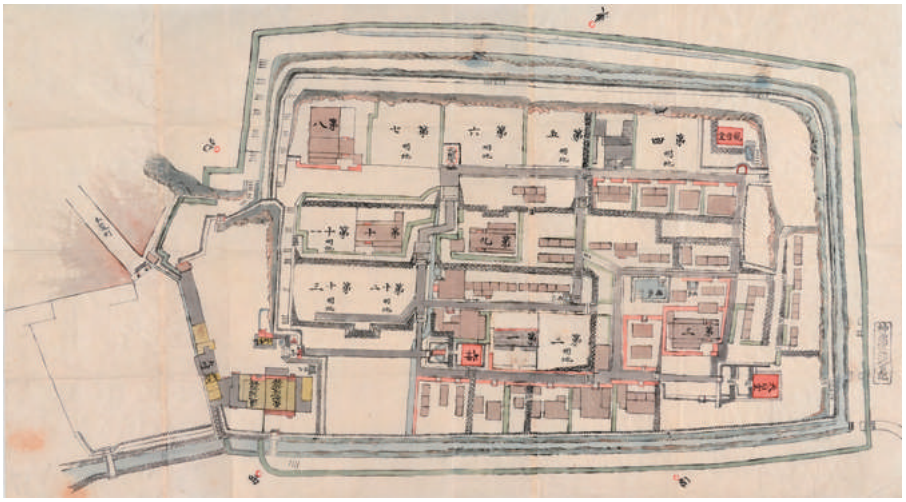

図3　唐人屋敷の絵図　「長崎唐館絵図面」慶応3年（1867）12月　当館蔵
唐人屋敷の19世紀初頭の敷地面積は9,373坪。

長崎の海防

外国の艦船が「鎖国」下の日本にやってきて国交・通商を求めた、と聞くと浦賀・横浜に来航した幕末のペリーがすぐに思い浮かぶだろう。しかし、長崎では来航が許可されていない外国船の出現が江戸時代を通じて少なくなかった。そのため、幕府は長崎の防衛体制（海防）を整えていく。

正保四年（一六四七）六月二六日、ポルトガル使節ソウザの乗った異国船が長崎に来航した。目的は八年前に幕府から禁止を言い渡された対日貿易の再開である。長崎奉行は江戸に急報する一方、翌二七日熊本藩に出兵を要請、さらに船橋を架けてポルトガル船を湾内に閉じ込めた。幕府は通商の再開不可をソウザに通達し、八月六日異国船は長崎湾を退去した。図4は熊本藩の関係者が事件に関する書類をまとめた古文書に添付されていたものである。事件をきっかけに、幕府は福岡・佐賀藩に命じて戸町と西泊（いずれも現在の女神大橋付近）に番所（警

備の陣屋）を建設させ、長崎の警備は強化される。

一九世紀にはいると、国際情勢の変動により外国船の来航はその数を増す。とりわけ文化五年（一八〇八）のフェートン号事件（イギリス軍艦の長崎港侵入事件）の衝撃は大きく、長崎の警備体制は見直しを迫られる。長崎湾付近にはそれ以前からあった防衛施設（台場等）にくわえて新たに台場が築造され、文化九年までに二四か所の台場が出現する。当館の資料群には長崎の台場を描いたスケッチも含まれ、海岸防備のようすをうかがうことができる（図5）。

横浜においても開港と同時期に神奈川台場が建造される。しかし、修好通商条約締結後につくられたこの台場は、外国艦船に祝砲を発射するための平和的・儀礼的なものであった。

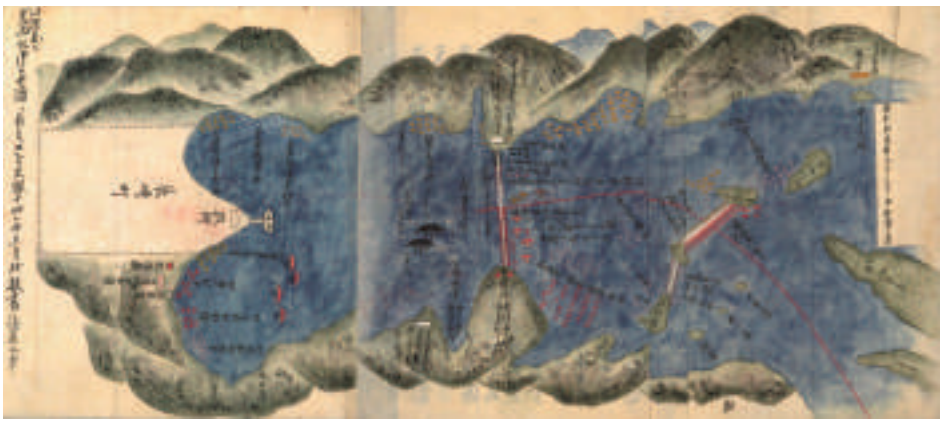

図4　来航したポルトガル船を包囲する　「長崎江黒船着岸之節御人数被差越候一件之抜書」
正保4年（1647）、天保14年（1843）写　当館蔵
ポルトガル船を諸藩（福岡藩・佐賀藩・熊本藩など）の船・軍勢が包囲する様子を描く。資料は事件当時作成された文書を天保14年に書き写したもの。

幕臣の古文書

展示資料としてはいささか地味だが、長崎に関わる古文書も興味深い内容をもつ。

天保一三年（一八四二）七月に長崎奉行の与力（長崎奉行組御小人頭持格与力）を命じられた小笠原貢蔵という幕臣がいる。ご子孫から当館に寄託されている貢蔵の関係文書（小笠原家文書）には、長崎赴任時の日記やオランダ商館長の接遇に関わる資料が含まれていた。

まず貢蔵の日記（「公私日記　長崎表在勤中」天保一四年）を確認してみよう。長崎市中の犯罪の記録、唐人屋敷への対処、諸藩の聞役（情報収集担当）から得た情報など、与力の業務に関わる事柄が主に記されるが、折々に長崎の年中行事のようすも書き留めており、風俗をうかがう資料としても興味深い。たとえば、四月八日の花祭り（釈迦の誕生日）には、長崎市中の「屋根」（軒先）に「躑躅之花」が飾られ、そのもようは「東都（江戸）の七夕の如し」と貢蔵は観察している。

さらに、貢蔵は弘化元年（一八四四）にオランダ商館長が江戸を訪れた際の接遇係を命じられており、そのときの業務に

図5　長崎周辺の台場を描く　「台場図（長崎）」当館蔵
画面下が長崎（市街）方向。女神（現女神大橋付近）から野母崎の遠見番所にいたる長崎の防衛体制が描かれる。

図6　「蘭人参府中公用留」弘化元年（1844）　当館寄託（小笠原家文書）

図7　丸山遊廓と長崎市街　「肥前長崎丸山廓中之風景・肥前崎陽玉浦風景之図」
歌川（五雲亭）貞秀画　文久2年（1862）　当館蔵

ついても「蘭人参府中公用留」というメモを作成している。図6は「蘭人参府中出役割」という仕事の分担表で、「長崎屋源右衛門宅（オランダ人の滞在先）部屋之見分（確認）」「紅毛人（オランダ人）着当日（の接遇）」「献上物調出来見分」「荷送出来見分」などの業務が各人に割り振られていたことがわかる。

なお、貢蔵の養子小笠原甫三郎は浦賀奉行与力、神奈川奉行支配調役など対外関係の役職をのちに歴任する。幕末の開港以前に外国関係の職務に就いた人物の子孫が、開港以後に同様の業務をおこなう例はほかにもみられる。開港前の対外折衝の経験は、親から子へ、長崎から横浜へと引き継がれていくのである。

多彩な絵画資料

本展ではここまで紹介してきた歴史的資料のほか、絵画資料にも注目すべきものが多い。表紙で紹介した「バッテイラ渡海の図」は長崎版画（長崎絵）のひとつで、素朴なタッチと穏やかな色彩が味わい深い（表紙の図）。長崎版画とは一八世紀なかばから幕末まで長崎で流行した木版画で、西欧人・中国人とその風俗・文物を描くものが多い。一方、幕末期に刊行された浮世絵はそれとは対照的なまでに華やかである。歌川（五雲亭）貞秀の「肥前長崎丸山廓中之風景・肥前崎陽玉浦風景之図」は、最盛期一五〇〇人の遊女を抱えたという丸山遊廓と長崎の市街を描いた名品。貞秀は横浜浮世絵、ことに鳥瞰図の第一人者であるが、幕末長崎の都市空間も緻密に描いていたのである（図7）。さらに、外国人の描いた幕末長崎の水彩画も珍しい。図8はチャールズ・クーパー＝キングが描いた長崎の街頭風景で、眼鏡橋からもほど近い麹屋町の通りをスケッチしたものである。作者はイギリスの軍人・地質学者で、一八六四年に来日し横浜の風景も描き残している。

今回の展示では、開港都市の「先輩」にあたる江戸時代の長崎を、横浜と比較しながら当館所蔵の歴史・美術資料かわかりやすく紹介する。旅と歴史を愛したブルームにならって、往時の長崎を旅するように楽しんでいただければと思う。

（吉崎雅規）

図8　長崎の通り　"Street in Nagasaki"
キング（Charles Cooper-King）画　幕末期　当館蔵
背後の山は風頭山。正面奥は興福寺の鐘鼓堂。

参考文献：
ドナルド・キーン「ポール・ブルームの情熱」（徳岡孝夫訳）当館編『ブルーム・コレクション書籍目録』第一巻、横浜開港資料普及協会、一九八二年
長崎市史編さん委員会編『新長崎市史　第二巻近世編』長崎市、二〇一二年

～横浜市歴史的建造物認定「旧根岸競馬場一等馬見所」認定記念～

館蔵コレクション展
根岸競馬場と建築家J.H.モーガン

2025(令和7)年4月12日(土)～5月11日(日)

1　はじめに

二〇二五(令和七)年一月、根岸の丘にそびえ立つ建造物が、「旧根岸競馬場一等馬見所」として横浜市認定歴史的建造物となった。鉄筋鉄骨コンクリート造七階建ての一等馬見所は、横浜が競馬発祥の地であることを象徴する建造物と言える(図1)。一九四三(昭和一八)年に根岸競馬場が閉鎖され、それ以来、競馬が行われることなく、七六年の歴史に幕を閉じた。戦後はアメリカ軍により馬見所やコース一帯が接収され、段階的に日本に返還された。一等・二等馬見所が返還されたのは一九八一(昭和五六)年のことである。今回の歴史的建造物認定を受けて、横浜市は根岸競馬場の今後の保存活用の方針を示し、横浜が洋式競馬発祥の地として、注目されるきっかけとなった。

当館及び横浜都市発展記念館には、根岸競馬場に関係する資料をはじめ、認定となった一等馬見所の設計を担当したジェイ・H・モーガン(一八六八－一九三七)に関係する資料を所蔵している。今回の展示は、認定記念として横浜と競馬との関わりや歴史、建築家モーガンについて多くの方々に知っていただきたいと企画し、開催した(図2)。

図1　「一等馬見所(背面)」『根岸競馬場アルバム』1930年頃、当館所蔵

図2　展示の様子

2　横浜と競馬場の歴史

横浜で洋式競馬が行われるきっかけは、一八五九年七月一日(旧暦：安政六年六月二日)の横浜開港で、居留地が設けられ、外国人が居留し、西洋文化の一つとして伝わったことによる。彼ら居留民は、娯楽や運動のために乗馬を行い、居留地内だけでなく、遊歩区域内(横浜から一〇里四方、約四〇キロメートル)を馬で出かけたりした。彼らの乗馬の様子や洋式馬具は、当時の日本人の興味関心をひき、いくつもの浮世絵の題材となったことで、洋式競馬が知られることになる。やがて、居留民からは競馬場の建設を求めるようになり、各国の外交代表団から幕府へ要望が出された。一八六六(慶応二)年、根岸の丘に本格的な洋式競馬場が建設された。しかし、根岸に競馬場が建設されるまでは仮であった。

横浜における最初の競馬大会の記録は、横浜元町で開催されたものである。横浜が開港して間もない、一八五九(安政六)年一一月に横浜を訪れたアメリカ人商人のフランシス・ホールの日記、一八六〇年

九月一日条に、横浜元町で競馬を開催したとの記載がある。このように居留民たちは日常的に乗馬を行い、競馬を開催していたが、彼らの行動が攘夷思想をもつ一部の日本人との摩擦を生み、文化・慣習の違いによる衝突が起きた。開港間もない横浜や江戸で、外国人殺傷事件が多発し、アメリカの通訳ヒュースケンの殺害（一八六一年一月）、東海道の生麦を遠乗り中のイギリス人四人のうち三人が殺傷された生麦事件（一八六二年九月）は、政治的な問題と併せて、居留民の乗馬や競馬が制限される結果となった。

横浜元町での競馬大会の開催後、現在、中華街となっている地、横浜新田を埋め立てた地に競馬場が建設される。一八六二（文久二）年五月一日・二日の春季、一〇月一日・二日の秋季の二回、競馬が開催され、『ジャパン・ヘラルド』紙には、競馬の告知記事が掲載された。しかし、同年九月一四日に発生した生麦事件により、居留地の外国人社会は、不穏な情勢のなかで、居留外国人を襲撃するといった風説が流れ、居留地の外に出て乗馬をすることが危険となり、居留地内で乗馬や競馬を楽しむ場所が必要となった。しかし、横浜新田は地盤が弱く、競馬場には適さず、居留地が拡大するなかで住宅不足を補うための用地となったために、居留民たちは別の競馬場の建設を求めた。そこで、一八六四（元治一）年にイギリスが主導して、各国外交代表団と幕府との間で「横浜居留地覚書」が締結された。第一条にて、調練場と競馬場を建設することが決められた。場所は吉田新田のうちの一つ目沼地を埋め立てるというもので、現在の蓬莱町、万代町、不老町、翁町、扇町、寿町、松影町一帯の地域となる。しかし、諸外国と幕府との間で利害の不一致により計画の実現には至らなかった。

競馬は一八六二年から二年近く開催されることはなかったが、居留民保護のため一八六四年、山手にイギリス軍・フランス軍が駐屯すると、イギリス軍が主催する競馬が開催され、その競馬をギャリソン競馬と呼んだ。ギャリソン競馬には、居留民も参加し、駐屯兵との交流が行われたが、日本の武士も競馬に参加したことが記録や絵に残っている。

一方で、競馬場は「横浜居留地覚書」から二年後の一八六六（慶応二）年に締結された「横浜居留地改造及び競馬場墓地等約書」において、居留民念願の競馬場が根岸に建設されることが決まった。費用は幕府が負担し、同年六～七月頃にイギリス横浜駐屯軍ボンド中尉による設計・監督のもと、コースの建設工事が進められ、秋には完成した。馬見所（スタンド）の設計は、イギリス人土木建築技師ウィットフィールドとドーソンが担当した。棟梁松之助の指示のもと、収容人数一五〇名の馬見所が一〇月に竣工した（図3）。翌年一月一一日、根岸競馬場で最初の競馬が開催された。

明治～大正期にかけて、根岸競馬場の運営は、居留民を中心に行われていたが、日本人も運営に加わるようになった。年二回開催された競馬は、はじめは二日間だったが、徐々に日数も増え、一九〇四（明治三七）年から四日間となっ

図3　「根岸競馬場全景」『ザ・ファー・イースト』(1870年11月16日号)、当館所蔵

図4　「明治半ば頃の根岸競馬場馬見所」明治中期、当館所蔵

図5　「[1901年]馬見所」タウネンド氏旧蔵写真アルバム、当館所蔵

た。すると居留民だけでなく、多くの日本人も訪れるようになった。(図4・5)。特に、明治天皇の行幸や政財界の有力者も訪れて、根岸競馬場が鹿鳴館のような日本人と外国人との社交・外交の場としての役割をもつようになった。

しかし、一九二三(大正一二)年九月一日に発生した関東大震災で、当時の木造三階建ての馬見所が半壊し、コースにも亀裂が入り、その年の秋の競馬は中止となった。翌年には再開したが、馬見所は急造のバラックで建てられていた。震災からの復興を目指すなかで、根岸競馬場では耐震の馬見所建設を計画し、その設計をアメリカ人のジェイ・H・モーガンに依頼した。彼が設計した馬見所が、現在そびえ立つ一等馬見所となる。

3 根岸競馬場と建築家モーガン

ジェイ・H・モーガンは一八六八年、アメリカ合衆国ニューヨーク州バッファローにて生まれた。彼が日本に来るきっかけとなったのは一九二〇(大正九)年に、アメリカを代表する施工会社であったフラー社が、日本に進出するにあたり、同社で働いていたモーガンを派遣したことによる。モーガンは、フラー社と三菱合資会社の合弁会社フラー建築株式会社の建築技師として来日した。彼は丸ノ内ビルヂング、日本石油ビル、郵船ビル、立憲政友会本部、神戸クレセント・ビルの設計に携わった。来日から二年後、モーガンはフラー建築株式会社を退職し、日本で設計建築事務所を開いた。

その矢先に発生した関東大震災で、モーガンはアメリカに帰国せずに震災で大きな被害を受けた横浜の復興建築を担い、彼が横浜で設計した作品は二一件を数え、震災からの復興を目指す横浜をモーガンが造ったと言える。そのなかで、一九二八(昭和三)年、根岸競馬場長で、モーガンの友人だったアイザックスからモーガンに根岸競馬場一等・二等馬見所の建設を依頼された。アイザックスからは、新スタンドは耐震性をもち、格調高い仕様で、コース全体を見渡せること、という条件が出された。そこで、モーガンは屋根に重量をかけない構造で、建物内部の支柱を減らすことで観覧席からコースを見渡せる新スタンドを提案し、アイザックスの要望に応えたのである。モーガンが設計、大倉土木株式会社(現在の大成建設株式会社)が施工を担当した根岸競馬場は、建設当時の建築図面が数多く残されている。モーガン設計建築事務所の所員であった大須賀矢薙氏が保管し、ご子息の常明・常良両氏から一九八六(昭和六一)年に当館に寄贈された。

一九二九(昭和四)年五月一九日、地上七階建て鉄骨鉄筋コンクリート造のスタンド建設に着手した。

図6 「根岸競馬場二等馬見所(増築後)」1934(昭和9)年、横浜都市発展記念館所蔵

一等馬見所は、同年一一月に竣工し、延べ面積約七,七〇〇平方メートル、観覧席四,五〇〇席のほかに貴賓室、委員室、食堂、騎手室、ラウンジ、休憩室、事務室などを備えていた。二等馬見所は、一九二九年一一月に着工、一等と同じく、鉄骨鉄筋コンクリート造で、建築面積五八七,〇五三坪、延床面積二,〇一八.五二坪で、翌年五月に竣工した。竣工後も整備は続けられ、一九三四(昭和九)年には、激増する入場者に対応するべく、二等馬見所の観覧席が増築され、収容人数は一二,〇〇〇人となった(図6)。一等・二等合わせて一六,五〇〇人を収容する競馬場となり、「日本で一番見やすいスタンド」と言われ、その後、日本各地に造られる競馬場のモデルにもなった。

建築家モーガンを公私共に支えたのは、妻の石井たまの氏であった。モーガンはまったく日本語を話せず、英語に堪能

図7 「モーガンとたまの夫人」
〔1932年1月2日〕、横浜都市発展記念館所蔵

なたまの氏が、秘書としてモーガンの仕事をサポートした（図7）。一九八七（昭和六二）年、石井たまの氏からモーガン関係の資料が当館に寄贈された。そのなかで、『根岸競馬場アルバム』は、一九三〇年頃、竣工したばかりの根岸競馬場一等・二等馬見所の外観・内観及び付属施設を撮影した写真二九点が収められている。アルバム写真の全点は当館のデジタルアーカイブで公開している。また、横浜都市発展記念館には、石井たまの氏の甥高橋利郎氏から寄贈されたモーガンの遺品や根岸競馬場の写真を所蔵している。建築図面や当時の写真は、今後の根岸競馬場の保存に大いに役立つ資料と言える。

モーガンの建築図面からは彼の設計プロセスを知ることができる。その例として、二等馬見所の建築図面三点を見ていくと、モーガンが二等馬見所をどのように設計したのかがわかる。〔一等・二等馬見所観覧席図面〕では、二等を少し斜めに配置している（図8）。これは二等観覧席をコースから見やすくするためと考えたのかもしれない。しかし、「観覧席配置図並競馬場一般平面図」を見ると、一等・二等は平行に配置されており、当初の計画から変更されたことがわかる（図9）。「観覧席増築計画図」（図10）は、二等馬見所観覧席の増築計画図となるが、図9には、二等の隣（左側）に鉛筆で増築予定の観覧席枠が描かれている。もしかするとモーガンは早い段階で増築を考えていたのかもしれないし、当初の計画では増築した際の観覧席がコースと重なってしまい、アイザックスが提案した「見やすいスタンド」というコンセプトから外れてしまう。将来的に二等を増築することを見越して、そのスペースを確保するために、二等を平行にしたのかもしれないという推測ができる。このようにモーガンの建築図面からは様々なことがわかる貴重な資料となる。

4　おわりに

現在残る根岸競馬場一等馬見所は、横浜開港後に西洋文化の一つとして洋式競馬が伝わり、横浜がその発祥の地であることを象徴する建造物である（図11）。競馬文化の普及・発展に外国人が関わっている点も国際港都横浜らしさが出ている。横浜市はこれから、一等馬見所の竣工から一〇〇年となる二〇二九（令和一一）年に向けて、整備・保存を目指すことの方針を出している。これからの整備にはモーガンの建築図面や竣工当時の写真が大いに役立つはずである。当館では今後も、競馬場の歴史を今後も伝えていくなかで、居留地と競馬場との関係の調査や新たな資料の掘り起こしを行っていくつもりである。

（白井拓朗）

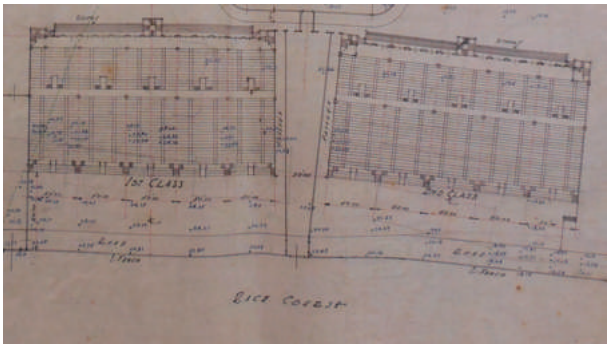

図8　〔一等・二等馬見所観覧席図面〕（部分拡大）年代不明、当館所蔵

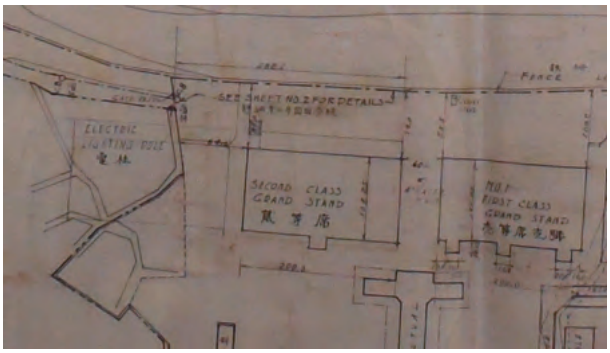

図9　「観覧席配置図並競馬場一般平面図」（部分拡大）
1928（昭和3）年9月6日、当館所蔵

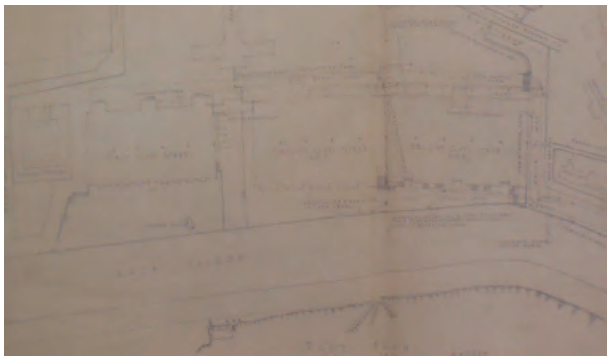
図10　〔観覧席増築計画図〕（部分拡大）1934（昭和9）年9月1日、当館所蔵

図11　「現在の根岸競馬場一等馬見所」2025（令和7）年2月23日撮影

館蔵資料紹介

横浜大空襲の惨禍を伝える体験者の記録

トピック

本年は戦後八〇年の節目の年に当たる。横浜は大戦末期に多くの空襲を受けたが、特に被害が大きかったのが、一九四五年（昭和二〇）五月二九日の横浜大空襲であった。この空襲では約五〇〇機のB29爆撃機による無差別爆撃のほか、約一〇〇機のP51戦闘機による機銃掃射が行われ、直後の公式発表には、死者三六五〇人、重軽傷者一〇一九八人、行方不明三〇九人、罹災者三一一二八人を出す悲劇が生じたことが記録されているが、実際にはより多くの犠牲者が出たと推測されている。

当館では横浜大空襲の惨禍を目の当たりにした林國治氏（一八九八～一九九四）が記した空襲体験記録を所蔵している。林氏は横浜の民間考古研究家であり、晩年に記した諸種の直筆原稿を当館に寄贈された。このうちの一点が「昭和四十八年記横浜空襲体験記」である。林氏は空襲当日、職場を休んで中区常盤町の自宅で家族と過ごしていたところ、空襲がはじまり、瞬く間に周囲が火に包まれる。このため、飼っていたカナリヤを逃がし、自転車に貴重品であったラジオと飯の入った御櫃を積んで家族と横浜公園に避難する緊迫した様子が体験記に記されている。空襲下の横浜公園からみた火災の描写は以下のとおりである。

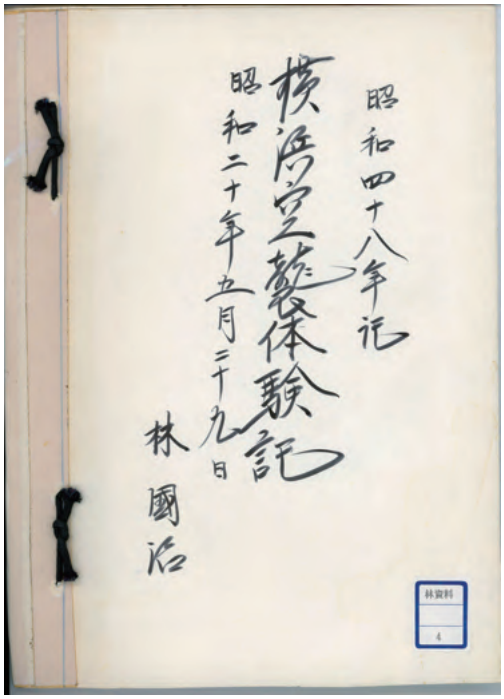
昭和四十八年記
横浜空襲体験記
昭和二十年五月二十九日
林國治

図1　林國治氏の空襲体験記録　1973（昭和48）年　当館所蔵（林國治資料№4）

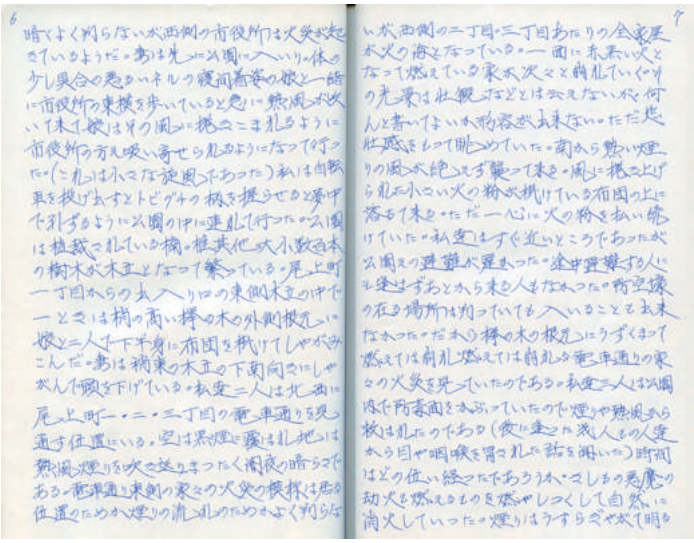

図2　横浜公園での避難の様子を記した部分

私たち二人は北西に尾上町二・三丁目の電車通りを見通す位置にいる。空は黒煙に覆はれ地は熱風煙を吹き送り、まったく闇夜の暗さである。

〔中略〕

西側の二丁目・三丁目あたりの全家屋が火の海となっている。一面に赤黒い火となって燃えている家が次々と崩れていく。その光景は壮観などとは云えないが。何と書いてよいか形容が出来ない。ただ悲壮感をもって眺めていた。南から熱い煙の風が絶えず襲ってくる。風に巻き上げられた小さい火の粉が掛けている布団の上に落ちてくる。ただ一心に火の粉を払い続けていた。

ここからは、空襲で燃える町をただ見つめることしかできない体験者の心境がうかがえる。空襲後の記述にも、不発焼夷弾を触った児童二名が爆発に巻き込まれて死んだエピソードや、黄金町駅前で見たおびただしい数の犠牲者の様子など、空襲の惨禍の実態が記されているほか、焼跡にバラックを建てる際の資材集めの苦労などが具体的に記されている。実際に空襲被害を受けた体験者にしか書けないこのような記録は、戦後八〇年を経て空襲体験者から直接空襲の話を聞くことが困難になりつつある現在、より貴重性を増しているといえるだろう。

（西村　健）

閲覧室より

江戸時代の武士について調べる

現代の日本において名前を記す場合、氏（姓・名字）と名（あるいはミドルネームなど）を書くことが一般的でしょう。しかし、江戸時代の武士の場合、名前の記載は複雑でした。

今回は江戸時代の武士の名前や履歴について調べる方法をご紹介します。

◆武士の名前の多様性

武士はさまざまな名前を持っていました。名字や実名（諱）以外にも、元服以前の幼少時に持つ幼名、通称である通名（仮名）、学者・文人などが本名以外に持つ号、武家官位制に基づく役職名（官途名・受領名など）で記載されることもありました。

現代の文献において、ペリー来航に対応し、日米和親条約調印を認めた際の老中首座といえば「阿部正弘」と表記されますが、古文書では「阿部伊勢守」「阿伊勢守」あるいは「伊勢守」「伊勢」などと表記されます。阿部正弘の場合、姓は阿部、実名は正弘、幼名は剛蔵といい、のちに主計と改めています。号は裕軒・学聚軒、役職名は主計頭・伊勢守となります。

なお、伊勢守とは本来、伊勢国を支配する国司の長官（守）のことですが、江戸時代の武士が名乗った役職名（掃部頭・相模守など）と幕府の職務内容とは基本的に関係がありません。

◆武士の家系をたどる

古文書に表記される「阿部伊勢守」「伊勢守」などが「阿部正弘」を指すと予め知っていれば人名辞典で確認できますが、そうでない場合は、「伊勢守」が誰にあたるのかを調べなければなりません。

①人名辞典の内容をさらに詳しく知りたい、②人名辞典に記載されていない人物の履歴を知りたい、③役職名で表記されている人名を知りたいという方は、人物の活動時期にもよりますが、まず『寛政重修諸家譜』（以下、『寛政譜』）を活用してみるとよいでしょう。『寛政譜』は寛政11年（1799）から文化9年（1812）にかけて江戸幕府が編纂した、大名・旗本家の系譜をまとめた全1530巻にわたる記録です。国立国会図書館デジタルコレクションや国立公文書館デジタルアーカイブにて画像（写本）を確認することができます（2025年5月1日現在）。

活字本はたびたび刊行されていますが、当館閲覧室では続群書類従完成会による『新訂 寛政重修諸家譜』全22冊・索引4冊（1964～1967年）を閲覧することができます（閉架）。このうち索引4冊は名前を調べる上で便利です。名字から調べたい場合は索引1の姓氏（家名）索引、実名から調べたい場合は索引1・2の諱索引（一）～（二）、幼名・通称・号・院号から調べたい場合は索引2～4の称呼索引（一）～（三）、役職名から調べたい場合は索引4の称呼索引「官職名の部」「国名の部」を確認してみましょう。

◆武士の履歴を復元する

『寛政譜』成立以降の武士の履歴を確認したい場合は、『柳営補任』を活用してみてはいかがでしょうか。

『柳営補任』は旗本根岸衛奮が天保8年（1837）から安政5年にかけて編纂し、その後加筆された幕府の役職に関する任免記録です。江戸時代の初頭から幕末までを網羅しているので、『寛政譜』後の武士の履歴を確認できます。当館閲覧室では東京大学史料編纂所編『大日本近世史料　柳営補任』1～6、索引上・下（覆刻、東京大学出版会、1983年）を閲覧することができます（閉架）。索引上が役職名索引・姓名索引、索引下が称呼索引（「官職名之部」「国名之部」「通称之部」）となっています。『柳営補任』1～6には役職ごとに就任者の人名、任免年月日、知行高などが記されています（一部、誤字があります）。

例えば、「外国奉行」の項目には「高弐千石　酒井隠岐守　忠行」「安政六未二月廿四日御小性組番頭ヨリ」「同年六月四日神奈川奉行兼帯」「万延元申九月十五日御勘定奉行」とあり、小姓組番頭→外国奉行（神奈川奉行兼帯）→勘定奉行という酒井忠行の履歴を確認することができます。さらに「小性組番頭」の項目を確認すれば安政6年（1859）2月24日以前、「勘定奉行」の項目を確認すれば万延元年（1860）9月15日以降の履歴をたどれるので、調査対象の武士の任免状況を復元することができます。

今回ご紹介したのは江戸時代の武士の調べ方の一端に過ぎません。他にも大名・旗本の名鑑である『武鑑』、屋敷地の場所を確認できる幕府普請奉行編『江戸城下変遷絵図集　御府内沿革図書』第1～20巻、別巻1・2（原書房、1985～1988年）などが役立つかと思います。

当館閲覧室や近隣図書館などに配架されている人名辞典類を総ざらいして、その特性を事前に把握しておくと調査が円滑に進むことでしょう。それら辞典類が何を典拠としているのかを確認してみてください。『寛政譜』『柳営補任』などの記載を発見できるかも知れません。

（神谷大介）

図　「貿易場」（刷り物）に記載された武士の名前と役職　当館所蔵

No.159

資料館だより

特別公開

長崎　―開港都市横浜の前提

会期：令和7年（2025）5月24日（土）～7月27日（日）
※会期中に一部の資料の展示替えを行います。
入館料：一般500円
小・中学生／横浜市内在住65歳以上250円
会場：企画展示室

特別公開関連企画

○展示解説

担当学芸員による展示解説を行います。
5月25日（日）10時30分～
7月5日（土）15時～ それぞれ30分程度
予約不要
参加費：無料（ただし入館料が必要）

○展覧会図録

横浜開港資料館編『長崎―開港都市横浜の前提』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団発行
A4判　24ページ（オールカラー）
660円（税込）

館蔵コレクション展示関連講演会アーカイブ配信

5月3日に開催された講演会「建築家モーガンと横浜」のアーカイブ配信を行います。
講師：青木祐介（横浜開港資料館・横浜都市発展記念館 副館長）
配信期間：2025年5月11日～12月31日
チケット代：1,000円
オンラインチケットサイト「teket」からの申込みとなります。

「たまくすの木」周辺にバリアフリーデッキ完成

クラウドファンディングにてご支援いただいた「たまくすの木（横浜市地域史跡）」周辺に設置するバリアフリーデッキが完成いたしました！

小川雄一コレクション寄贈を記念して感謝状贈呈式が行われました

小川雄一氏より横浜開港資料館に、商館時計163個を含む時計関連資料245点が寄贈されました。これを記念した感謝状の贈呈式を2025年3月14日に開催いたしました。

寄贈資料は、2025年秋に特別公開にて一般公開を予定しております。

小川雄一氏（右）と西川館長（左）

近藤さや香×横浜元町タカラダ×横浜開港資料館コラボクライネトレー販売！

近藤さや香さんプロデュースによる、所蔵資料の横浜浮世絵「横浜港崎町楼上之図 岩亀楼繁昌之図」を活用したクライネトレー（豆皿）を100セット限定で販売中。

横浜開港資料館　利用案内

開館時間　9:30～17:00（入館は16:00まで）
休館日　月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始ほか
入館料　一般200円　小・中学生／横浜市内在住65歳以上　100円
＊特別公開「長崎―開港都市横浜の前提」会期中
一般500円　小・中学生／横浜市内在住65歳以上　250円。

閲覧室の利用について

事前予約制（先着順）です。閲覧希望日前日（の開室時間中）までに、電話で予約してください。
開室時間　10:00～12:00　13:00～16:00
休室日　月曜日・火曜日（祝日の場合は翌日）、資料整理日（毎月第4金曜日）、年末年始ほか
利用料　100円（閲覧室のみご利用の場合）
電話番号　045-201-2150（直通）

ミュージアムショップ・カフェ　PORTER'S LODGE

営業時間　9:30～17:00（カフェラストオーダー16:30）
店休日　開港資料館に準じます

アクセス

・みなとみらい線「日本大通り」駅4番出口から徒歩2分
・JR関内駅（南口）、市営地下鉄関内駅から徒歩約15分
・JR桜木町駅から市営バス「日本大通り駅県庁前」下車、徒歩1分

ホームページ

http://www.kaikou.city.yokohama.jp/
X（旧twitter）@yoko_archives
Instagram @yokohama_kaikou

管理運営団体 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

＊今後の状況により変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ・お電話でご確認ください。